

シガテラ (ciguatera)

シガテラは、太平洋、インド洋、カリブ海などの熱帯海域を中心に発生している、動物性自然毒食中毒である。日本では亜熱帯の沖縄県から毎年数件の発生報告があり、低頻度ながら恒常的発生地域である。

主に熱帯海産魚に起因するため、CFP (ciguatera fish poisoning: シガテラ魚類中毒)と表記されることが多かったが、FAO/WHO 合同専門家会議において、CP (ciguatera poisoning: シガテラ中毒)を推奨することとなった。これは、魚類以外にも巻貝などの藻食性動物による事例報告もあるためである。また *ciguatera* と *poisoning* はともに病態を示す用語であるが、熱帯以外では認知度が高くないため、中毒であることを強調するため、あえて重複した表記となった。

原因物質はシガトキシン (*ciguatoxin*: CTX) 類で、付着性渦鞭毛藻 (微細な単細胞の藻類) *Gambierdiscus* 属が産生し、食物連鎖によって藻食動物から肉食魚へ伝搬・蓄積される。

シガテラの症状は、消化器系、神経系、呼吸器系の3つに分けられる。神経系症状として、掻痒や関節痛などに加えて、シガテラに特徴的な温度感覚異常などがある。温度感覚異常は、冷たいものに触れたときに痛みや電氣的刺激のように感じたり、水などを口に含んだときに炭酸水のように感じたりするもので、ドライアイスセンセーションとも呼ばれる。

沖縄県での主な原因魚種はフエダイ科のバラフエダイ (*Lutjanus bohar*)、イッテンフエダイ (*Lutjanus monostigma*)、およびハタ科のバラハタ (*Variola louti*) の肉食魚で、この3種で全体の70%程度を占める。沖縄産魚類の調査では、肉食魚の成長とともに有毒率が高くなる傾向が認められており、シガテラの報告がある肉食魚の大型個体には注意が必要である。

沖縄以外では、亜熱帯の鹿児島県奄美地方や沖縄などの海域で、レジャーフィッシングなどにより漁獲された肉食魚による中毒事例が報告されている。一方、本州から九州の太平洋沿岸で漁獲されたイシガキダイ (*Oplegnathus punctatus*) の大型個体 (いわゆるクチジロ) による食中毒事例が散発的に発生しており、これらの海域にもシガトキシンを産生する渦鞭毛藻が分布しているものと考えられる。また、紀伊半島沖で漁獲されたバラフエダイから食中毒をおこす量のシガトキシンが検出された報告もあるので、大型肉食魚、特に上記4種については注意が必要である。

地球温暖化に伴う海水温の上昇によって、シガトキシンを産生する渦鞭毛藻の生息密度が高まることが予想され、今後注意が必要な動物性自然毒食中毒である。

(大城 直雅)